関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (01) 2072
発行人　千神　国夫
編集人　水上　義博
（一部10）

古書全般売買
株式会社　天牛本店
南区道頓堀中座前
(01) 二七五八―九

（写真は冬の白馬）

新年を迎えて

大学の自治はなぜ必要なのか。偶問である。教授にしろ、学生にしろ大学人に取って正に偶問である。

しかし、われわれは今、この偶問を必要としなければならない程の窮地にある。具体的に、ポポロ事件にみる司法官憲の態度もそうであったし、わが学園の現実もそうである。

学問の自由は保障されなければならない。

学問の場における当然の前提である。大学の自治はその意味において必要なのである。

峻厳にして犯し得ない自然の偉容は聖なる神の摂理である。

しかし、なおも神への挑戦を続け自然の征服を望む精神の忍耐と努力がわれわれにはある。青年の勇気と知性があらゆる可能性を内包して自然と対決するのである。

学問は、その可能性を育み人間の偉大なる意義を定義する。

学問は永遠の指導者であり、聖なる神の支配をも可能にすることをわれわれに示してきた。

K・T

論説　平和の危機を深める65年
自主体制の確立が必要

一九六四年は、国内においては国力がこの時ほど強も必要ではないであろうか。世界人民の、平和への願望が、その可能性をより確実にし将来への戦いをより強い団結の中で進められなければならないと思う。そのためにも、ここに、日本国内外の情勢を簡単にふれたいと思うのである。

さて、国際面における世界の多元化への動きとその中での政治的経済的変化は、わが国の対外政策の変更をせまるものであり、そこでは、アメリカ大統領の交代、ソ連における指導者の変更、中国の核実験、ベトナム情勢の悪化、南ベトナムの内部崩壊、ドゴール仏大統領の中立主義的外交、ヨーロッパ諸国の自主性の強化、ラテンアメリカ諸国の自主的動向、アフリカ諸国の自主的動向、アジア諸国の自主的動向、国連の機能の変化、国連の財政危機、国連の平和維持機能の変化、国連の人事の変化、国連の予算の変化、国連の組織の変化、国連の機構の変化、国連の活動の変化、国連の目的の変化、国連の性格の変化、国連の役割の変化、国連の意義の変化、国連の存在の変化、国連の将来の変化、国連の歴史の変化、国連の伝統の変化、国連の文化の変化、国連の教育の変化、国連の宗教の変化、国連の哲学の変化、国連の思想の変化、国連の理論の変化、国連の実践の変化、国連の理念の変化、国連の目的の変化、国連の方法の変化、国連の手段の変化、国連の結果の変化、国連の原因の変化、国連の責任の変化、国連の義務の変化、国連の権利の変化、国連の自由の変化、国連の平和の変化、国連の安全の変化、国連の繁栄の変化、国連の幸福の変化、国連の人類の変化、国連の世界の変化、国連の宇宙の変化、国連の神の変化、国連の人の変化、国連の心の変化、国連の魂の変化、国連の精神の変化、国連の生の変化、国連の死の変化、国連の愛の変化、国連の憎の変化、国連の善の変化、国連の悪の変化、国連の美の変化、国連の醜の変化、国連の真の変化、国連の偽の変化、国連の正の変化、国連の邪の変化、国連の聖の変化、国連の俗の変化、国連の天の変化、国連の地の変化、国連の人の変化、国連の物

学生自治の分解と再生

基本線の確立を

自治意識を失う二部学生

▼▼▼米国原子力潜水艦が平和を願う国民の反対を押して寄港、既成事実の上に立つて、新しい事実が当然のように起り、反動政策は大手を振って通り抜ける。これに対して学生は如何に対処すべきなのか。

▼▼▼一方学内では授業料闘争が盛り上りをみせているが如何に学園闘争と結びついているのか。これらはすべて学生の自治の中で解決が必要ではなかろうか▲▲▲

学生運動と夜学生

金学運分裂によって学生運動をその方向と使命を失なって来ている故にのぼる分派と、その結果による セクト化が搾取の見逃しを失なって抗争を続けている。この中で過去の反省と将来の統一への気運が現在各方面から要求され、事実その努力は、次第に見通しをもってきた。われわれはこの機運を歓迎し再統一への努力を今一歩進めて行かねばならない。

そこでわれわれは搾取と保護に苦しんできた過去に対する反省と失敗の繰返しを避けなければならないことはいうまでもないことである。しかしこうした運動の総括をする前に、学生自治そのものの犯した誤り、あるいは現在犯している誤りを吟味してみる必要があろう。特に二部、大学における自治の問題点についてここに問題提起をし、われわれ自治の反省としてみたい。なぜならここには多くの矛盾が蓄積され蓄積されつつあり、現在もなお、その誤りを繰返しているからである。特にわれわれの学園における、あまりにも無批判な、自治意識と、無知によって引き起こされた学生不在状況は、もはや学生自治の崩壊を待つのみでしかない。

そこでわれわれは、二部大学における自治の問題点を指摘するとともに本学の学園闘争の経過の中で発生した矛盾問題の中での根本的解決の方向を考えてみたい。もちろん、そこにはわれわれ